

小澤重男先生を偲ぶ

In Memory of Professor Shigeo Ozawa

ボルジギン・バヤルメンド／白音門徳

(内モンゴル大学モンゴル学学院)

Borjigin BAYARMEND

(The Academy of Mongolian Studies, Inner Mongolia University)

私が初めて小澤重男先生にお目にかかったのは、1979年7月のことだったと思います。そのとき私は大学1年生でした。どこからかは忘れてしまいましたが、知らせがあって、日本の学者が来て発表するということでした。それは、小沢先生と大阪外国語大学の精松源一先生のお二人が、チンゲルタイ教授の招きで内モンゴルをご訪問なさったときのことでした。お二人は私が初めてお会いした日本人でした。

小沢先生のご発表は日本語とモンゴル語の関係についての内容でした。日本語そのものがあまり出来ないときでしたので、発表の内容については、実はあまり理解できませんでした。今でも覚えているのは、日本語の「切る(きる／kir-u)」は、モンゴル語のkerči-(切る)、kirüge(のこぎり)、kürje(シャベル)の語幹に現れているker-, kir-, kür-と関係があるということでした。世の中にはそういう研究もあるのだなという感じで終わりました。それから7年後、発表なさった方が私の人生の恩師になり、私がその方の弟子になろうとは夢にも思いませんでした。

1986年10月から1988年4月まで、私は日本の文部省の奨学金をもらって、東京外国語大学に留学しました。小沢先生が私の指導教官になり、私は正式に小沢先生の弟子になりました。私は内モンゴル大学から文部省の奨学金をもらって小沢先生の下に留学した5番目の学生でした。

外国は初めての私にとって、発展した日本のすべてが新鮮で驚きでした。中国の改革開放政策が実施されて7年目になっていましたが、学問の分野にまではほとんど及んでおらず、新しい言語理論などはほとんど知られていなかった時期でした。そのため、私は小沢先生の研究分野である日本語の起源と元朝秘史関係の本を読むと同時に、かなりの時間をかけて新しい言語理論に関する本を読みました。私が1999年から現在まで内モンゴル大学でずっと教えている博士課程の授業の「現代言語学」の基礎は、そのときに作られたものです。

私は本を読んで分らないところがあれば、いつも小沢先生にお聞きしていました。先生にはいつも熱心に教えていただき、よく「バヤルメンド君はそんな本も読んでいて偉いね」と励ましていただきました。その一言が、私が継続して一生懸命に本を読む力にもなっていました。

1年半の留学期間中、小沢先生の学問に対する熱意と真摯な態度が一番印象に残っています。そのときは丁度、先生は大著『元朝秘史全釈』を書かれていた時期なので、『元朝秘史』にある言語や内容についてのお話が多かったと記憶しています。そのときに特別研究員として東京外国語大学にいらっしやっていたケンブリッジ大学のウルグング・オノン教授と3人で討論することもよくありました。オノン先生も後で出版なさった“The History and Life of Chinggis Khan: The Secret History of the Mongols”を書かれていた時期でした。あるときの討論で私が「中世モンゴル語の語頭の h は完全に消えたわけではなく、場合によっては x の形で残っています。例えば、バーリン方言では『元朝秘史』第196節の「牙速許速 (yasu hūsü)」の hūsü (毛) が üsü ではなく hūsü ~ xūsü の形で今でも残っています」と言うと、先生はすごく興味を持たれたようで、そのときはまだ20代だった学生の話が『元朝秘史全釈』の中に引用されたのでした〔小沢重男『元朝秘史全釈続攷』(上)、風間書房、東京、1987年、357-358頁〕*。

1987年の夏休みに東洋文庫でモンゴル語のクラスがあり、小沢先生、窪田新一先生、そして私の3人が講師になりました。1か月の授業が終わって、私は東京の真夏の暑さを逃れて、1人で北海道に旅行に行きました。旅に出る前に、小沢先生のお宅へ電話をかけて北海道へ旅行に行くことを申し上げたら、先生は「それなら北海道大学の黒田信一郎君と会ってください」とおっしゃいました。そこで私は、北海道に着いてから黒田先生に電話をかけて自分の名前を言うと、黒田先生は「バイルメンドさん、小沢先生のお宅まで電話をかけてください。急用があるようです」とおっしゃいました。そのころは携帯電話などありませんでしたので、私は公衆電話を利用して先生のお宅へ電話を入れました。すると先生は『元朝秘史』の中の一文を読み上げて、「バイルメンド君、あなたはモンゴル人としてこの文を聞いたときの第一印象はどうですか」とお聞きになったのです。そのとき先生はウランバートルで開かれる国際モンゴル学者大会で発表する論文を準備なさっていました。言語の研究で表面的な意味の理解に留まらず、その言語を母語にしている人間の感覚を大事にしている先生の研究方法と学問に対する真摯な態度が今でも心に残っていて、それは私の人生の財産にもなっています。私が小沢先生を自分の人生の恩師だと言っているのは、私に日本に留学するチャンスを与えてくださっただけでなく、一生かかっても使い切れないほどの精神的な財産を与えてくださったことにあります。

1988年3月に帰国してからも、いつも手紙で小沢先生と連絡を取っていました。1994年に岩波書店から先生の名著『元朝秘史』が出版されました。私はその本を何回も興味深く拝読しているうちに、モンゴル語に翻訳したらどうかと思うようになりました。この考えをチョイジンジャブ先生に話したら、先生も大賛成で監修までなさってくれることになりました。そこで私は小沢先生に手紙を書き、先生から委託書をいただいて、『元朝秘史』をモンゴル語に翻訳しはじめたのです。本書の第1章が「元朝秘史の世界」とされていたことに目を引かれ、モンゴル語に訳すときに本の題名を『元朝秘史の世界』とし、1998年8月に内モンゴル大学第3回モンゴル学国際シンポジウムが開かれたときに内モンゴル人民出版社から出版しました。私の知っている限り、これが小沢先生の本の中で初めてモンゴル語に翻訳された本だと思います。私のこの訳本は2002年にウランバートルの国際モンゴル学会からキリル文字に翻字されて出版されました。

2008年2月から7月まで、私は栗林均教授の招きで東北大学東北アジア研究センターを客員教授

として訪問しました。仙台に着いてから小沢先生に直接電話をかけるのは失礼かと思い、仙台に来ていることを手紙で報告し、宿舎の電話番号をお伝えしました。

2008年4月19日は土曜日でした。朝6時ごろに宿舎に電話が入りました。何かあったのかと驚き、急いで電話に出ると、「私は小沢です」という先生のやさしい声が聞こえてきました。私はびっくりすると同時に感動しました。先生は「体の調子があまり良くないので、5月の学会に行けるかどうか分かりません。でも君と本当に会いたいですね。来てください。土曜日と日曜日を挟んで来た方がいいな」とおっしゃっていただきました。そこで5月16日に先生のお宅にお邪魔して、3時間ほどいろいろと話すことができました。

2014年5月末、私は千葉大学の招きでまた来日しました。5月31日が土曜日なので、私はわざと他のスケジュールを入れず、どうしても小沢先生に会いたいと心の中で決めていました。そこでまず午前中に小沢先生のお宅へ電話を入れました。奥さまが留守でしたので、先生が電話に出ましたが、耳が遠くて話がほとんど聞き取れないらしく、「誰ですか？ 聞こえません」とおっしゃって電話は切れてしまいました。でも私は先生がお元気で自宅にいらっしゃることが確認できたので、午後お宅をお邪魔することにしました。私が先生のお宅に着いたときは午後3時ごろになっていました。私が先生のお宅に着くと、面識のない1人の女性がドアを開けてくれ、私の名前を聞いてから先生に報告し、許可をもらってから入りました。部屋に入ってから分かったのですが、先生は5人をご自宅に集めて『元朝秘史』の講義をなさっているところでした。講義は3週間に1回開かれているそうです。5人ともみな女性で、その中に私の知り合いの大島立子教授もいらっしゃいました。大島先生は愛知大学をすでに定年でお辞めになっていましたが、勉強はまだ続けていらっしゃいました。そこで私も講義を拝聴しました。27年ぶりに小沢先生の授業を聞くことができたので、本当に幸せな気分になりました。

先生は私に日本語はどうですかとお聞きになりました、私の日本語を心配されていたようですが、私が日本語で答えると喜んでいらっしゃいました。「バイルメンド君は私の授業によく出ていました」とみなさんの前で私を褒めてくださり、自分の弟子が学院長までやっているのでも喜んでおっしゃいました。先生はまた1998年に私の家に来てお粥を食べたことが今でも忘れられないとおっしゃっていました。1998年8月、内モンゴル大学第3回モンゴル学国際シンポジウムのとき、宴会の食事やホテルの食事が先生のお口に合わないというので、先生はいつも私の家に来て家内の作った家庭料理を召し上がっていました。そのことをまだ覚えていらっしゃるとは思いませんでした。

2014年5月にお目にかかったときは、見た目にも先生のお体の調子があまり良くないのが分かりました。でも自分で日常生活は出来ているし講義までなさっているので一安心しました。私は先生の大著『元朝秘史全釈』をモンゴル語に翻訳するつもりなので、先生にご許可をいただきたいと申し上げると、先生はすぐ喜んでくださり、「ありがとう」とおっしゃいました。講義の後で許可書をお願いすると、「しばらく字を書いていません」とおっしゃいましたが、空白の原稿用紙に2枚書いていただきました。

体の調子があまり良くないことは先生ご自身もよく分かっていらっしゃいましたので、「私もチン先生のところに行きたいな」とおっしゃっていました。その前の年の末に亡くなられた、小沢先

生の親しい友人であるチンゲルタイ先生のことをおっしゃっていたのです。講義に出ていたみなさんは「先生、まだ早いですよ。バヤルメンドさんの翻訳が終わるまで待っていて」と言っていました。私が「翻訳するときに分からないことがあれば、まとめて先生に伺いに参ります」と言うと、先生は「私にも君に聞きたいことが沢山ありますよ」とおっしゃいました。やっぱり本当の学者は違うなど私は感心しました。別れるときに先生はまた「内蒙古の人々はいいですね。来るたびに寄ってきます」とおっしゃいました。先生の大著『元朝秘史全釈』のモンゴル語の訳本を先生がご健在のときに出版できなかったのは残念ですが、いつか必ず出版します。これは先生との約束です。

先生のお宅を失礼するときにエレベーターまで見送ってくださった奥さまが、「今日はあなたが来てくれてうちの先生は本当に喜んでいましたよ」とおっしゃいました。先生のお宅を出て、先生のいつも歩いていた道を通って駅へ向かう途中、突然これが最後ではないかという感じがしました。すと思わず涙が出てきて、流れている入間川の水が私の涙と繋がっているような気がしました。

それが確かに最後となりました。いいえ、最後ではありません。先生は弟子の心の中にいつまでも生き続けています。先生の学問に対する情熱と真摯な態度は遺伝子 (GENE) となって弟子に、その弟子の弟子に、その弟子の弟子のそのまた弟子に……いつまでも受け継がれてゆくのです。

(* []内は編集委員会による補足である。)